

茅野市 ハケ岳通信

■尖石縄文考古館



【大英博物館内「THE POWER OF DOGU」会場案内】



【大英博物館グレート・コート内の懸垂幕】



【「縄文のビーナス」・「仮面の女神」展示風景】

「縄文のビーナス」・「仮面の女神」、大英博物館「THE POWER OF DOGU」展に出展

平成21年9月10日～11月22日イギリスロンドン大英博物館において開催された「THE POWER OF DOGU」展に、茅野市尖石縄文考古館所蔵の棚畠遺跡出土国宝土偶（愛称：縄文ビーナス）と、中ッ原遺跡出土重要文化財土偶（愛称：仮面の女神）が出展されました。この展覧会は、全国で約18,000点とも推計されている縄文時代の土偶の中から、その造形や、デザインの面白さ、時代的特徴を示す、日本の著名な土偶等67件を一堂に集めた展覧会でした。

棚畠遺跡出土の国宝土偶の他に国宝に指定されている、北海道著保内野遺跡土偶や青森県風張遺跡の土偶も出展されました。三つの国宝土偶が揃って展示される機会は今回が初めてで、また、重要文化財も含めて全国の優品の土偶が一堂に会し、海外で展示されることではなく、その意味においても注目を浴びた展覧会でした。

この展覧会は大英博物館内では小さな規模のものでしたが、地元での反響は意外と大きく、初めて見る土偶の造形美やその神秘性に注目が集まり、特に「縄文のビーナス」に表現されている流麗なフォルムなど、「仮面の女神」の仮面表現等の造形感覚は、現代芸術やアニメのキャラクターへの類似も語られていました。

土偶や縄文の持つその芸術性は、世界に普遍的なものとしてとらえられ、また、土偶には多くの人々を引き付ける力があることを今回の展覧会で見ることができました。

なお、「THE POWER OF DOGU」の帰国展として東京国立博物館で「国宝 土偶展」としてお披露目され、日本の方々にも、土偶や縄文の持つ芸術性、その面白さが再認識されました。

守矢文書にみる御柱祭

平成22年4・5月に御柱祭がおこなわれます。

当館では、御柱祭にあわせて、1月1日より企画展「守矢文書にみる御柱祭～寅年の古文書～」を開催しました。御柱祭は、寅と申の年に行われる神事で、今年は寅年であるところから、過去の寅年に行われた御柱祭について展示を行いました。

展示した古文書で最古のものは、「神長守矢氏從五位下信濃守神満実書留（守矢満実書留）」の文明2年（1470）の項の記述です。これには、本来4月6日に行われるべき御柱祭が16日に延期され、曳行は難航をきわめ、前宮の御柱は亥の刻（午後10時）にやっと立てられたといいます。また、三の御柱の日には、大町（宮川区安国寺）で喧嘩があったと記されています。

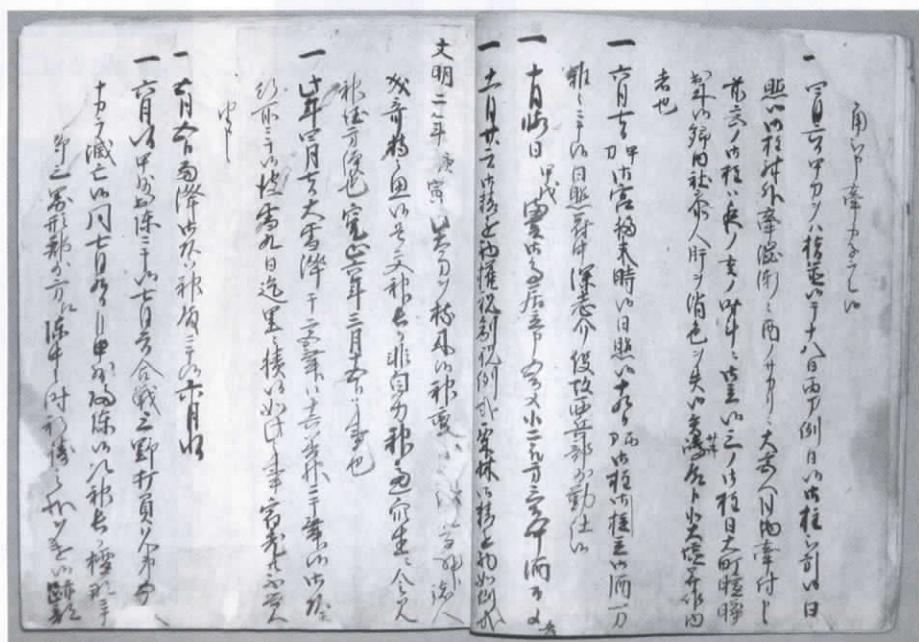
江戸時代の古文書では、寛政6年（1794）・文化15年（1818）・嘉永7年（1854）の御柱の状況と、桟敷・御柱行列について展示しました。

文化15年の御柱のときには、大祝が九ツ（正午）頃来たため、御柱を引き出すのが遅くなってしまい、さらに、御柱が大きく、手間取っているうちに、八ツ（午後2時）頃に雨が降り出し次第に強くなってきました。深夜までかかっても建てられられず、人足が力尽き夜明けまで休憩となつたようです。翌日も、強い雨が続いてなんとか建てられましたが、合羽・提灯は残らず破れたというほど、

大変な御柱だったといいます。

御柱行列については、天明2年（1782）・文化15年（1818）・文政13年（1830）・嘉永7年（1854）の神長官の行列の並び順と配役に関する古文書を展示しました。天明2年までは、神長官の行列の人数は39人でしたが、文化15年には25人となっています。これは、天明8年（1788）に、藩から騎馬行列が手間取ることで、人数の簡素化を命じられたためであると、記録にあります。

平成22年4月1日より、「守矢文書に見る御柱祭」と題しまして、企画展を行います。今度は、寅年に限らず、御柱の起源などについての展示も行う予定です。



■「神長守矢氏從五位下信濃守神満実書留（守矢満実書留）」

文明2年（1470）頃

■文化財係

エーヨー節・天屋節茅野市無形文化財に指定

エーヨー節は諏訪地方を中心に、江戸時代から盆踊り唄として盛んに唄われ、踊られてきたもので、その初源は田植え唄にあるとも言われています。

歌詞には「ヨイソレ」との相の手や、「エーヨー」との離し詞があり、割合軽妙なリズムを持っています。

歌詞には諏訪地方の風土や農村の暮らし、男女間の情愛等を唄っており、古き良き時代の名残をとどめています。

寒天製造が茅野市域で始まったのは江戸時代末期からで、寒天製造は現代に続く茅野市の伝統産業です。

明治時代以降には寒天製造者、工場も増え、各地から出

稼ぎ者が集まり、茅野市は寒天の大産地となりました。天屋節は寒天製造業者が集中する市内の宮川方面に起こり、唄い継がれてきたものです。この唄は寒天製造工程の「草掻き」作業の作業唄として唄われてきたものです。機械化に伴い原型は失われてしまいましたが、作業の動作は踊りに取り入れられ、天屋節として継承されています。

エーヨー節、天屋節共に地域の貴重な芸能として価値が高く、無形文化財として指定し、保護・保存・普及を図つてまいります。

中尾彰－津和野・東京・蓼科－展

茅野市美術館では2009年7月24日から8月23日まで、茅野市ゆかりの画家・中尾彰の企画展を「中尾彰－津和野・東京・蓼科－展」と題し開催いたしました。また同展は中尾彰にゆかりの深い島根県立石見美術館・練馬区立美術館との共同企画による巡回展となりました。

1904年に島根県津和野町で生まれた中尾彰（1904-1994）は独学で絵を学び、10代は満州で過ごしています。1931年の第1回独立美術協会展入選以来、同協会を中心にお絵画を発表し、1949年には同協会会員に、また1992年には同協会会員功労賞を受賞しています。初期の暗い色調の作品から、青や緑などの優しい色彩で形態を単純化した作風へ、また草木と人物を組み合わせたパステル調の抒情的な作風へと展開しました。このような画家としての活動の一方で、1935年頃から文芸同人誌「日暦」に参加して詩文を発表。また1941年から子どものための美術運動を開催し、児童出版物に執筆するとともに教科書や新聞の挿絵などを多数手がけました。しかし、戦中はもとより戦後も火災によって多数の作品が失われており、これまでその画業はあまり取り上げられることはありませんでした。この間、1935年には東京都練馬区に転居し、1953年には茅野市の蓼科高原にアトリエを建て、以後一年の半分近くを過ごしています。本展では茅野市を取材した作品を含め、油絵画約60点を中心に、絵本・童画などをまじえて、画家としての生涯を振り返り、その全貌に迫りました。

同展の関連企画として、美術を語る「中尾彰」を7月25日に茅野市民館アトリエにて開催しました。関係学芸員である横山勝彦氏（長野県信濃美術館 副館長）、真住貴子氏（島根県立石見美術館 学芸グループ課長）と当館学芸員、さらに中尾彰の生前に交流のあった茅野市在住の方々や参加者を交え、作家について語りました。7月26日、8月23日には会場で「みんなで話そう作品鑑賞会」と題した鑑賞会を開催し、合計21名が参加。学芸員と参加者の皆さんとで作品について話をしながら鑑賞しました。7月30日には「親子のための作品観賞会」を開催し、3組7名の親子が参加。学芸員の案内で作品の感想を述べ合いながら作品を鑑賞しました。その他、8月9日に朗読会「中尾彰・蓼科の花束」を会場で開催するなど、同展は作家の魅力に加え、作品を通して地域の素晴らしさをみつめる機会になったと思います。



【親子のための作品観賞会】

茅野市美術館アート×コミュニケーション#1 「こころみる、ここをみる。」

茅野市美術館アート×コミュニケーション#1「こころみる、ここをみる。」では、佐藤時啓（写真家・東京藝術大学准教授）を講師に招き、全7回のワークショップと、ワークショップの成果発表の場として展覧会を行いました。

10月11日（日）から25日（日）まで開催された展覧会では、企画展示室内を『ドキュメントスペース』、『プロジェクションスペース』の2つのスペースに区切り、『ドキュメントスペース』では、参加者が第1回から第6回までのワークショップで制作した作品、ドキュメント写真と映像、参加者のコメントなどを展示しました。



【展覧会場 ドキュメントスペース】

ダンボールと虫メガネを使った“のぞくカメラ”をのぞき込み、逆さまに映る風景に驚く方や、人が入れるサイズの巨大ピンホールカメラで撮影した大判写真に見入り、「こんなに綺麗に撮影できるんですね。」と感心されるお客様も数多くいらっしゃいました。

暗室に仕立てた『プロジェクションスペース』では、講師の佐藤氏が8×10カメラで茅野市内を撮影した作品、参加者が茅野市内及び近郊の風景を撮影した作品を、数台のスライド・LEDプロジェクターを用いて壁面などに投影しました。また、OHPプロジェクターの上に金魚の入った水槽を乗せ、幻灯機（マジックランタン）の原理を用いて壁面や天井に動く像を投影するインスタレーション（空間演出）も行いました。



【展覧会場 プロジェクションスペース】

展覧会期中の10月17日（土）、18日（日）には、サイトseeingバスカメラが茅野市内を走りました。路線バスの内部にスクリーンを張り、暗室に仕立てたバスに乗って、市内をめぐるツアーに出かけると…？窓の両側に付けたレンズ越しに映る外の風景が逆さまになったまま動いていきます。乗車された参加者の方々は、約20分のあいだ、不思議な動く映像を楽しんでいました。

ワークショップ参加者の年代は小学生から70歳代までと幅広く、写真が好きで参加された方から、なんとなく面白そうだから、という理由で参加された方も。作家や他の参加者の方々と一緒にものを作ることの楽しさや、手作りのカメラを通して、身近な風景や物事を改めて気付き直すきっかけになったのではないかでしょうか。

平成21年度企画展「諏訪鉄山」

茅野市北山の糸萱（いとかや）地区の東に位置する金掘場（かねほりば）は、武田信玄がこの地で鉄鉱石を採掘したと伝えられ、その由来から金掘場という地名になったといわれています。



【諏訪鉄山石遊場採鉱切羽】



諏訪鉄山は現在の蓼科中央高原一帯を中心に、蓼科湖から奥蓼科に至るまでに点在する褐鉄鉱を産出する鉱山の総称です。日本の製鉄業の隆盛と共に注目され、昭和12年ころから第二次世界大戦を挟み昭和38年ころまで稼働していた、群馬・俱知安に次ぐ日本第三位の鉄鉱山で、閉山までの26年間におよそ120万トンの褐鉄鉱を産出したと推測されています。

諏訪鉄山の主な採鉱場所は、金掘場・長尾根・石遊場・明治鉱床などです。その他多くの小規模な鉱床が複雑に点在しており、露天掘りで採掘されました。諏訪鉄山の鉱床群は沈殿鉱床あるいは沼鉄鉱などと分類され、その生成には八ヶ岳の火山活動、温泉や鉱泉などが密接に関わっています。沈殿鉱床は現在でも生成され続けていると考えられます。

平成21年7月18日(土)～10月4日(日)

明治鉱区跡地の渋川温泉近くの湿地では、泥状の鉄分が堆積する様を観察することができます。



最盛期の諏訪鉄山には2000人を超える人々が働いていました。採鉱された鉱石の輸送には索道が架けられ、トラック輸送により茅野駅へと運ばれ、日本钢管京浜製鉄所へと送られました。対日経済封鎖、戦争の激化により、諏訪鉄山への期待はますます高まり、終戦前には茅野駅から芹沢（花蒔駅）間には専用鉄道が敷かれました。

今でも蓼科中央高原を散策すると、自然地形とは異なった尾根を切り取ったような窪地や、鉱石を積み出した万石の跡など、当時の痕跡がわずかに残されています。



企画展では、昭和の産業遺跡「諏訪鉄山」を、採掘・輸送、戦争との関わり等を当時の写真資料やわずかに残されている実物資料、体験談などから探りました。また、八ヶ岳の噴火から鉱床の成り立ち（講演）、諏訪鉄山の鉄鉱石で鉄を作ってみよう（実験）、諏訪鉄山を歩く会なども併せて開催しました。

茅野市の博物館・文化財だより **八ヶ岳通信 No.28** 発行年月日 平成22年3月31日

| | | |
|----------------------------|---------------|--------------------|
| 編集・発行 茅野市尖石縄文考古館 〒391-0213 | 茅野市豊平4734-132 | TEL (0266) 76-2270 |
| 茅野市神長官守矢史料館 〒391-0013 | 茅野市宮川389番地の1 | TEL (0266) 73-7567 |
| 茅野市美術館 〒391-0002 | 茅野市塚原1-1-1 | TEL (0266) 82-8222 |
| 茅野市八ヶ岳総合博物館 〒391-0213 | 茅野市豊平6983番地 | TEL (0266) 73-0300 |